



馬 耳 東 風

「小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ」。中山道の信濃の入り口佐久から小諸に入ると思わず口ずさむ。浅間山を背に懐古園で千曲川の流れを望む眺望は、まさに詩人藤村の世界である。突然、草笛が聞こえてきた。振り向くと、10数人ほどが輪あずまやになっている。旅心に響く、どこかもの悲しい音色だ。近くの四阿あずまやで何曲か鑑賞させていただいた。静かに成熟した風を感じながら、出会った子に聞いてみた。なんと「千曲川旅情の歌」全部をそらんじて聞かせてくれた。みんなが暗唱しているのだという。感性豊かな心を育てる山里の教育力に感銘した。再び訪ねた折に、修業僧横山祖道の草笛演奏機を見つけた。「歌哀し佐久の草笛」に引かれ草笛を吹き続けたという。子ども達に囲まれ、まさに現代の良寛さまを連想する。高速道路の開通で、小諸は一気に飛び越せるが、千曲川の古城と草笛の魅力は、旅人を引きつけ懐古園へと誘う。葉っぱを口にあて吹いてみたくなるのだ。家畜生理学の佐久間勇次先生の自宅が、川越の藤村ゆかりの老舗旅館「佐久間」で、藤村の執筆姿を見た記憶や堀口大学ら文士と入間川の川遊びを楽しんだという語らいを思い出す。

「木曾路はすべて山の中である。」藤村の「夜明け前」の書き出しだ。明治維新の改革のなかで、木曾路に住み着き息づく維新の理想と現実を、父の悲劇をとおして必死に庶民の生活を書きあげている。

新しい時代に藤村の苦悩は続く。先に著した「破戒」の主人公丑松の生涯と重ね見る。屠牛場の生と死のはざまの心理描写に思わず息をのむ。中国の2012年ノーベル賞受賞作家莫言モイーエンの「牛」が描く、文革期寒村の荒涼の大地で這いつくばって生きる人々、そこに登場する獣医師老董ラオ ドンとそれを取り巻く農民達が、大魯西ルーシー、小魯西シヨウシ、双脊シュオフンジーという3頭の牛の去勢手術をめぐる生と死を凝視する様と重ねてしまう。文革期農村が抱える生き様が実にリアルに描かれ、改革・開放後の中国農民の潜在意識と現在の人口流失や格差拡大の原点を思わせる。中山道木曾谷で基礎産業の林業は、伊勢神宮御用材の御み杉山そまやまの自然休養林を控えながらも、銘木木曾檜は今も不振だと聞く。活路の漆工芸は、伝統産業として有名である。旧態依然とした建物が多数宿場が注目され、国の重要伝統的建造物群保存地区として妻籠について奈良井が選定され、今や文化財観光立地に活路を見いだした。妻籠宿と馬籠宿は峠を挟み、馬籠は最近岐阜県に編入された。永年保存運動に取り組んできた奈良井宿松坂屋漆工房のご主人は、今も往時のたたずまいの一力茶屋跡の店頭みに控えて、立ち寄る旅人に、用意した和紙に毛筆で赤い襟巻き地藏尊を描き、「無事（祈る）あなたの先祖はあなたの中に」と即興的に墨書し落款を押す。実に素早く書き上げ、傍らの奥さんがそっと手を貸し渡してくれる。旅人を温かく迎え無事を祈る宿場である。「夜明け前」から80余年、木曾路は、旅情豊かに人々を引き付ける藤村ゆかりの道である。 (柏)